

コリマ・ユカギール語の節連鎖の発達についての試論

遠藤 史

1. はじめに

本論文の目的は、コリマ・ユカギール語の複文に見られる節連鎖 (clause chains) に関して、歴史統語論の視点からその発達の段階を素描した上で、発達に関して働いたと考えられる要因を考察することである¹⁾。節連鎖は節連鎖構造 (clause-chaining constructions) とも呼ばれ、この言語の複文のかなりの部分を作り上げている構造であるが、さまざまな時期に現地で収集されたテキスト資料を調べてみると、その出現の様相は時期によって異なることがわかる。通時的な視点から考察するなら、これは節連鎖の歴史的な変化、一語で表現するなら発達と捉えられよう。このような発達に際して何らかの要因が働いたと想定することは興味深い試みであり、本論文はそれらの要因を考察し、試論的に提示することも目論んでいいる。

ユカギール語の本格的な言語学的研究はごく最近始まったに過ぎないが、ユカギール語を記録した資料はより古くからある。中でも特筆すべきは民族学者ヨヘリソン (Waldemar Jochelson) による一連の調査・研究である。帝政ロシアの末期にシベリアで民族学的調査を行ったヨヘリソンは、北東シベリアへの2回の調査旅行 (1895~97年および1901~02年) を通じて、現地で聞き取ったユカギール語の資料を多く得ることができた²⁾。彼はそれらの資料を整理して、ユカギール語の文法概要 (Jochelson 1905) を発表し、さらに後年著した浩瀚なユカギール民族誌 (Jochelson 1926) の中に収める形で、ユカギール語の語彙集とテキスト集を公刊している。こうして文法・語彙集・テキスト集が揃ったことにより、当時のユカギール語の全体像を知ることが可能になる。さらに、ヨヘリソンの収集した言語資料の多くは、現在ではコリマ・ユカギール語と呼ばれる言語の過去の姿なので、ユカギール語 (特にコリマ・ユカギール語) は、歴史言語学的研究がある程度できる状況にあると言ってよい。この状況を踏まえて本論文では、20世紀末~21世紀初頭 (現代)、19世紀末~20世紀初頭 (ヨヘリソンの記録した時期)、それ以前 (散発的ながら記録は存在する) の3つの時期に分けてコリマ・ユカギール語の資料を検

1) 本研究はJSPS科研費16K02675および21K00526の助成を受けたものです。過去の数回の現地調査の際、筆者を暖かく迎え入れてくださったネレムノエ村の皆様方に心からの感謝を申し上げます。

2) ヨヘリソンの調査旅行の経路はJochelson (1926) に付された地図によって辿ることができる。その経路は北極海沿岸からコリマ川沿いまでの広い範囲に及んでいるが、言語学的調査が集中的になされたのはヴェルフネコリムスク (現在のネレムノエ村の近く) 周辺のコリマ川上流の地域であった。これは今日のコリマ・ユカギール語が話されている地域と概ね一致する。

討し、節連鎖の発達の過程を探る。

本論文の構成は次の通りである。続く第2節では、上記の3つの時期のそれぞれについて、節連鎖の中心的要素である副動詞の意味と文法的特徴を指摘する。その議論に基づいて第3節では、テキスト資料の検討も行い、節連鎖の大まかな発達の過程を提示する。第4節では、以上を広い視野から検討し、節連鎖の発達に際して働いたと考えられる要因を検討する。この第4節においては、同系統の言語であるツンドラ・ユカギール語の資料も加えて検討を行い、記録されている資料以前の段階についても論じることを試みたい。

2. コリマ・ユカギール語の3つの時期における節連鎖

本節では上記の3つの時期、すなわち20世紀末～21世紀初頭、19世紀末～20世紀初頭、およびそれ以前に分けて、コリマ・ユカギール語の節連鎖の出現の様相を観察する。表記の煩雑さを避けるために、この3つの時期のそれぞれを「現代」(=20世紀末～21世紀初頭)、「19世紀末」(=19世紀末～20世紀初頭)、および「早期」(=それ以前)と呼ぶことにしたい³⁾。本節における検討はこの順序、つまり時を遡る形で進めていく。検討を始めるにあたって節連鎖の全貌を把握しておく必要があるため、資料も研究もそれなりに揃っている現代のコリマ・ユカギール語から出発する方がよいと考えるからである。

なお、以下の議論の対象は節連鎖に絞られるので、この言語における複文のうち、補部節や関係節によるものは当面の議論から除く。補部節というのは、次の例文(1)のような複文である。補部節は動詞の項となりうるもので、名詞的機能を持つ。

- (1) mit palatka lanin kel-l-ə mödis'
 [1PL テント 側へ 来る -VN-INSTR] 聞こえる -I3SG⁴⁾
 「(それが) 私たちのテントの方にやってくるのが聞こえた」[NK22-12]⁵⁾

一方、関係節というのは、次の例文(2)のような複文である。関係節は名詞(この言語では後

3) コリマ・ユカギール語の歴史言語学的研究において、この3つの時期が確立されているという意味ではないことに注意されたい。この3つの時期を立てる理由はもっぱら、現時点で見出しうる資料の時的制約による。

4) 本論文におけるユカギール語の例文は原則として、1行目に形態素境界を伴った原文、2行目にグロス、最後に本文全体の訳を示す。形態素分析、グロス、本文全体の訳は筆者が作成したものである。なお、グロスに付けられた角括弧は節の境界を示す。グロスに用いられる省略記号一覧は本文の末尾に記載した。

5) 角括弧の中のNKはNikolaeva(1997)を指す。これは現代のコリマ・ユカギール語の民話を集めたテキスト資料である。その後続く数字は民話の番号と文番号を指す。たとえば22-12は22番の民話における12番目の文という意味である。

続する名詞)を修飾しうるもので、形容詞的機能を持つ。

- (2) [...] taŋ foromə modo-l me:stə-gə [...]
 [その 人 住む-VN] 場所-LOC
 「(…) その人の住む場所で (…)」 [NK47-29]

節連鎖はこれら以外、すなわち様々な副詞的機能を持つ節の連なりによって作られる複文のことである。

2.1 現代のコリマ・ユカギール語における節連鎖

現代のコリマ・ユカギール語では節連鎖による複文が発達しており、テキスト資料でも広く見られる。次のようなものがその具体例である：

- (3) marqi-pə-gi tude jekečan kes'i:dəllə tabud-ə šolxi:la:m.
 [娘-PL-POSS 3POSS 鍋 持ってくる-CONV] それ-INSTR 叩く-INC-T3SG
 「娘は自分の鍋を持ってきて、それで叩き始めた」 [NK38-53]

この例に見るように、節連鎖の中ではほとんどの場合、副詞的機能を持つ従属節が主節に先行し、主節が複文全体をしめくくる。副詞的機能を持つ従属節の末尾には副動詞が置かれる(例文(3)では kes'i:dəllə 「持ってきて」)。副動詞は動詞語幹に接尾し、副詞的機能を持たせる屈折形式であり、以下で見ると、この言語には数種類の副動詞がある。また、副詞的機能を持つ従属節の数は特に決まっておらず、話者の選択に任される：

- (4) taŋ tittə tuis-ə moj-t kind'ə n'as'in oɔo:t
 [その 3POSS 桶-CONV 持つ-CONV] [月 顔-ALL 立つ-CONV]
 jö-t önmə-gə l'i:l'əl-u-m, [...]
 [見る-CONV] 知恵-LOC 支える-EVID-△-T3SG
 「桶を手を持ったまま月に向かって立ち、(月を)見ながら考えた(…)」 [NK46-14]

この例では従属節が3個連続し、最後は主節によりしめくくられている。

従属節の末尾に置かれる副動詞にはいくつかの種類がある。まず意味の面から二分するならば、(A) 時間的な意味を表す副動詞と、(B) それ以外の狭い範囲の意味に特化した副動詞がある。(B) に属する副動詞は目的や仮定などの狭い範囲の意味に特化しているため、以下、特化した意味を持つ副動詞と呼ぶことにする。

まず (A) のタイプの副動詞から見る。このタイプの副動詞は機能から見て2つに分けられる。その副動詞が現れた節の直後で、(A1) 主語が変わらないものと、(A2) 主語が変わるものである。たとえば例文 (4) において、副動詞 *mojt* 「持ったまま」の主語は、次の節の副動詞 *oko:t* 「立ち」の主語と同一である。つまり、副動詞 *mojt* が現れた節の直後で主語は変わらない。それゆえこの副動詞は、(A1) 主語が変わらないものに属する。仮にここで主語が別のものになっていれば、その副動詞は (A2) の方に属することになる。

現代のコリマ・ユカギール語では (A1) に属する副動詞が3つあり、最もよく現れる異形態で代表させて、*-t* 副動詞、*-de* 副動詞、および *-delle* 副動詞と呼ぶ。*-t* 副動詞は、主節の表す動作・状態と同時進行的に起こっている動作・状態（「～しながら」「～しつつ」など）を表す（実例は例文 (4) を参照）。*-de* 副動詞もやはり、主節の表す動作・状態と同時進行的に起こっている動作・状態を表すが、テキスト中での出現頻度は高くない。次の例は筆者が現地で話者から聞き出したものである：

- (5) *puđenmie-de čomo-je ja:l-ek.*
 [高い-CONV 大きい-ATTR]⁶⁾ 木-FOC
 「高く大きな木だ」

一方、*-delle* 副動詞は主節の表す動作に先行する動作を示す（実例は例文 (3) を参照）。*-delle* 副動詞は *-t* 副動詞とともに、テキスト中になりに頻繁に現れる。

(A2) に属する副動詞は、動名詞（標識 *-l*）が所格（標識 *-ge~ke*）に屈折したもので、それが属する節の主語の人称に応じて次の6つの形を持つ⁷⁾：

- | | | | |
|------------|------------------|--------|--------------------|
| (6) 1 人称単数 | <i>modo-lge</i> | 1 人称複数 | <i>modo-luke</i> |
| 2 人称単数 | <i>modo-lge</i> | 2 人称複数 | <i>modo-luke</i> |
| 3 人称単数 | <i>modo-dege</i> | 3 人称複数 | <i>modo-ŋidege</i> |

（動詞語幹 *modo-* 「住む、暮らす」）

このように形態論的には動名詞の所格形であるが、節連鎖における統語的機能は上記の副動詞と並行的なので、本論文では副動詞に含めて扱い、1 人称の形で代表させて *-lge* 副動詞と呼ぶ。実例は次の通りである：

6) 例文 (5) においては、角括弧で囲まれた関係節（形容詞的に次の名詞にかかる）の中に節連鎖が含まれていることに注意されたい。

7) このパラダイム (6) の中で、3 人称単数・複数に現れる *-de-* は 3 人称の所有者を表す。また 3 人称複数に現れる *-ŋi-* は動詞の屈折接辞における (3 人称) 複数の標識である。

(7) [irkid'e modo-ŋidəgə] irki-n šoromə-lək kel-u-l.

あるとき 住む -CONV 1つ -↑ 人 -FOC 来る -△ -SF

「あるとき (彼らが) 暮らしていると, 一人の男がやって来た」 [NK38-8]

この例に見られるように, -lge 副動詞が現れると, その直後に主語が変わる。たとえば例文 (7) では, 副動詞節の主語が3人称複数 (「彼ら」) であるのに対し, 次の節では別の主語である「一人の男」に変わっている。なお, -lge 副動詞の場合, 主節の表す動作・状態に対する時間的な前後関係は問われない。この結果, 例文 (7) のように主節に対して先行する動作を表すこともある一方で, 次の例文 (8) のように同時に起こっている状態を表すこともできる:

(8) taŋ paj foromon'ul-gi jukuo-dege parna: jajsə-le

その 女 家族 -3POSS [小さい -CONV] カラス 卵 -INSTR

legite-ŋa:

養う -T3PL

「その女の家族は, (女が) 幼いとき, カラスの卵で (彼女を) 育てた」

次に, (B) 特化した意味を持つ副動詞について見る。最も頻度高く現れるものは -din 副動詞である。この副動詞は動作の目的を表す:

(9) mət omos'ə pugəs'ə moro-dəllə mət kapkan-pə

[1SG 良い:ATTR 暖かい:ATTR 着る -CONV] [1単 罝 -PL

jö-din kebes'ə.

見る -SUP] 行く :1SG

「私は良い暖かい服を着て, (私の) 罝を見に出かけた」 [NK71-2]

仮定の意味を持つ副動詞が2種類ある。この2種類の違いは, その副動詞が現れた節 (仮定を示す節) の直後で主語が変わるか, それとも変わらないかという点にある。まず, 仮定を示す節の主語がそのまま変わらない場合, -ŋide 副動詞が使われる。次の例文 (10) では, 仮定を示す節の直後の節 (ここでは主節) の主語は「彼」(3人称単数) のまま変わらない:

(10) tudel ču:l-e min'ŋide met-in' kej-te-m.

[3SG 肉 -INSTR 取る -COND] 1SG-DAT 与える -FUT-T3SG

「彼は肉を取ったら, 私に (それを) くれるだろう」

また、仮定に対する帰結を表す節（ここでは主節）には未来時制が現れるという文法的特徴も指摘できる⁸⁾。

一方、仮定を示す節の主語のあとで主語が変わる場合には、仮定を示す節の主語の人称に応じて、次の6つの形の 하나가選ばれる：

(11) 1人称単数	modo-lgene	1人称複数	modo-lukene
2人称単数	modo-lgene	2人称複数	modo-lukene
3人称単数	modo-degene	3人称複数	modo-ŋidegene

(動詞語幹 modo-「住む、暮らす」)

1人称単数の形で代表させて、この副動詞を -lgene 副動詞と呼ぶことにしよう。-lgene 副動詞のパラダイムは上記(6)の -lge 副動詞のものとよく似ているが、仮定の標識である接尾辞 -ne が末尾に付加されている点が特徴的である。例文は次の通り：

(12) nigijje mit pundu-l'el-gene met=omoč.

[昨日 1PL 話す -EVID-COND] AFF:HYP= 良い :I3SG⁹⁾

「(そのことについて) 私たちが昨日話していたら、さぞかし良かっただろうに」

-lge 副動詞の場合と同じく、-lgene 副動詞の直後では主語が変わる。たとえば例文(12)では、仮定を示す従属節の主語が mit 「私たち」(1人称複数)であるのに対し、副動詞が現れた直後の節(この例では主節)の主語は3人称単数に変わっている。

2.2 19世紀末のコリマ・ユカギール語における節連鎖

次に約1世紀の時を遡り、19世紀末のコリマ・ユカギール語における節連鎖の実例を観察する。この時期のコリマ・ユカギール語における副動詞のレパートリーは現代のものと大きく変わらないものの、細部に異なるところもある。以下、この時期の文法の概要を記述した Jochelson (1905) に基づいて、節連鎖の実例を見ていく。

まず、(A) 時間的な意味を表す副動詞では、現代と同じく、その副動詞が出現する節の直後

8) この文法的特徴は、より古い時期のコリマ・ユカギール語にも共通して見られる。文例(18)(19世紀末)、および文例(24)と(25)(それ以前)を参照。

9) 例文(12)で帰結を表す節(ここでは主節)に未来時制が現れない理由は、仮定を表す節の副動詞に含まれる接尾辞 -l'el が反実仮想的な意味を持つからである。このような場合には帰結節に(空想的)仮定の意味の前倚辞 et= が現れる(この例文中では met=<me=et= の中に含まれている)。時期を遡っても同じ文法的特徴が見られることについては例文(19)と(21)(19世紀末)を参照。

で、(A1) 主語が変わらないものと、(A2) 主語が変わるものがある。(A1) に属する副動詞としては、-t 副動詞、そして -delle 副動詞がある。例文は次の通り：

- (13) met anil leg-u-t corile.
 1SG [魚 食べる -△ -CONV] 書く :T1SG
 「私は魚を食べながら (手紙を) 書いた」(Jochelson 1905:407)

- (14) met eye a:delle numo-yeklin xon-je.
 1SG [弓 作る -CONV] 家 -後ろ 出かける -I1SG¹⁰⁾
 「私は弓を作って (から) 狩りに出かけた」(Jochelson 1905:407)

なお、Jochelson (1905) の記述では、時間的な意味を表す -de 副動詞はあげられておらず、-de 副動詞は仮定の意味を持つとされている (以下の例文 (18), (19) を参照)。この点は現代のコリマ・ユカギール語と異なる。

主語が変わる (A2) のタイプの副動詞としては、現代と同じく -lge 副動詞 (形態論的には動名詞の所格形) がある。例文は次の通り：

- (15) mit yuo-luke tudel anil-e igde-m.
 [1PL 見る -CONV] 3SG 魚 -INSTR 捕える -T3SG
 「私たちが見ていると、彼は魚を捕えた」(Jochelson 1905:407)

ヨヘリソンは同じページで人称に応じた 6 つの屈折形をあげており (1 人称単数 yuo-lge, 3 人称単数 yuo-dege, 3 人称複数 yuo-nidege など)、それらは (6) であげた現代のものとも一致する。19 世紀末の段階において、-lge 副動詞は固有のパラダイムを持ち、既に現代と同じ程度にまで発達していた可能性が高い。

(B) 特化した意味を持つ副動詞については、まず、現代と同様、動作の目的を表す -din 副動詞がある：

- (16) met lodo-din kieče.
 1SG [遊ぶ -SUP] 来る :I1SG
 「私は遊びに (= 遊ぶために) 来た」(Jochelson 1905:399)

10) 「家の後ろに出かける」というのは、コリマ・ユカギール語では「狩りに出かける」ことを指す婉曲表現である。

なおヨヘリソンは、動名詞の向格がこの形の代わりに使われうると述べている (Jochelson 1905:400)。ヨヘリソンの記述によれば、次の例は (16) と同義である：

- (17) met lodo-l-ŋin kieče.
 1SG [遊ぶ -VN-DAT] 来る :1SG
 「私は遊びに (= 遊ぶために) 来た」 (Jochelson 1905:400)

この例文で「動名詞の向格」にあたるのは -l-ŋin (-l は動名詞, -ŋin は向格の標識) という形であり、現代のコリマ・ユカギール語では、目的を示す動名詞としては用いられない。これは現代と異なる点である。

仮定の意味を持つ副動詞は3種類があり、現代のものと同じく、仮定を示す節の直後で主語が変わらない場合と、主語が変わる場合とがある。前者に属するものは2種類あり、-de 副動詞と -ŋide 副動詞である。-ŋide 副動詞の例文は現代と同様なので省略し、以下に -de 副動詞の例文を示す：

- (18) met a:-de kei-t.
 [1SG 作る -CONV] 与える -FUT:T1SG
 「私は (それを) 作ったら, (あなたに) 与える」 (Jochelson 1905:399)

- (19) met a:-lel-de met ot=kei-φ.
 [1SG 作る -EVID-CONV] 1SG HYP= 与える -T1SG
 「私がもし (それを) 作ったら, 私は (あなたに) 与えるだろうに」
 (Jochelson 1905:399)

この2つの例文からわかるように、19世紀末のコリマ・ユカギール語における -de 副動詞は明らかに仮定の意味を持っていた。既に述べたように、この点は現代と異なる。

仮定を示す節の主語の直後で主語が変わる場合については、現代と同じく、仮定を表す節の主語の人称に応じて屈折した、-lgene 副動詞の6つの形のの一つが選ばれる：

- | | | | |
|------------|----------|-------|------------|
| (20) 1人称単数 | a:-lgene | 1人称複数 | a:-lukene |
| 2人称単数 | a:-lgene | 2人称複数 | a:-lukene |
| 3人称単数 | a:-deune | 3人称複数 | a:-ŋideune |
- (動詞語幹 a:-「作る」) (Jochelson 1905:398)

3人称単数・複数で -u- という要素が出ることを除けば、これらは現代と同じ形であり、統語的機能も同様である¹¹⁾。例文を示す：

- (21) mit a:-lel-u-kene, omni ot=min-ŋam.
 [1PL 作る -EVID-△ -COND] 人々 HYP= 取る -T3PL
 「もし私たちが（それを）作ったなら、人々は（それを）取っただろうに」
 (Jochelson 1905:399)

これらのことから、19世紀末の段階において、仮定の意味を伴う節連鎖は現代と同じ程度にまで発達していた可能性が高い。

2.3 早期のコリマ・ユカギール語における節連鎖

ヨヘリソン以前の時期にまで時を遡ると、体系的な記述も詳しい資料もないので、残された断片的な記録から当時のコリマ・ユカギール語の姿を探るしかない。幸いなことに、Schiefner (1871a, b) をはじめとする少数の論文が当時の段階で得られた言語資料をまとめてくれているので、それらに基づいて検討を進め、節連鎖の全体的な状況を概観してみよう。

Schiefner (1871a) は、1870年1月に北東シベリアのアナディル川流域を訪れた Baron Gerhard von Maydell が提供したユカギール語の資料、およびその分析から成る¹²⁾。本論文にとって有用なのは、そこに含まれている111個の短文である。その大半は単文であるが、ごく少数の複文と思われるものが含まれており、それらを分析することで節連鎖の実例がある程度得られる。

これまでの分類の枠組に沿って、この資料から得られた節連鎖の実例を以下に示したい。まず、(A) 時間的な意味を表す副動詞による節連鎖の例文は次の通りである：

- (22) mit-in solilowji-pa köl-ŋni aji jondo-luka.
 1PL-DAT チュクチ人 -PL 来る -I3PL [まだ 眠る -COND]
 「(私たちが) まだ眠っている間に、チュクチ人たちが私たちのところにやって来た」
 (Schiefner 1871a:607, 例文 53)

11) この -u- という要素は、3人称の屈折形の末尾の -gene の中の ge が音声的に弱化した結果生じたものである。それゆえ、本質的に異なった要素ではない。

12) 北東シベリアのアナディル川流域ではかつてユカギール語が話されていたことが知られている。ただし、現在この地域でユカギール語は話されていない。Schiefner (1871b) に収録された短文リストの末尾には1から12までの数詞が載っており、それらはコリマ・ユカギール語とほとんど同じであるため、本論文ではコリマ・ユカギール語の資料として扱っている。

この例文の最後の単語 *jondoluka* 「眠っている間に」には接尾辞 *-luka* が含まれている。この接尾辞の形は、(6) で示した *-lge* 副動詞のパラダイムにおける 1 人称 /2 人称複数の形と酷似しており、同じ要素と考えられる。さらに、この副動詞が含まれた節と主節との間で主語が異なるという文法的特徴も *-lge* 副動詞と並行的である¹³⁾。以上より、早期のコリマ・ユカギール語において、(A) 時間的な意味を表し、(A2) 主語が変わるタイプの副動詞による節連鎖の存在は確認できる。

ここで興味深いことは、時間的な意味を表す副動詞のうち、(A1) 主語が変わらないタイプの副動詞の例がこの資料に見出されないことである。現代なら *-t* 副動詞や *-delle* 副動詞などがこのタイプに属する。主語が変わらないタイプの副動詞の方が形態論的に単純であり、かつ文法上の機能も直截だと思われるので、この状況はやや奇妙に思われる。

次に、(B) 特化した意味を持つ副動詞について見る。まず、目的を表す副動詞については、*-din* 副動詞の例はなく、*-lnjin* の形が一例ある。

- (23) *tanpa kwei-ni aji-nu-ja-l-njin, čumut adaku-n*
 仲間 行く -I3PL [撃つ -PROG-INC-VN-DAT] 皆 2つ - ↑
kukudeija-p-la men'-ŋa
 猟銃 -PL-INSTR 取る -T3PL
 「仲間たちは狩りをするために出かけた。皆2つの猟銃を持った」
 (Schiefner 1871a:607, 例文 57)

一方、仮定の意味を持つ副動詞による節連鎖の例はいくつか見出せる。まず、仮定の意味を表す *-de* 副動詞による節連鎖の例が2つある：

- (24) *mot nug-da tet lomdak mot-in kei-ta-mik?*
 [1SG 見つける -CONV] 2SG 何 1SG-DAT 与える -FUT-T2SG
 「私が(それを)見つけたら、君は何を私にくれるだろうか?」
 (Schiefner 1871a:609, 例文 79)

- (25) *tet nug-da mot tet-in kuneli-n örpoja-k*
 [2SG 見つける -CONV] 1SG 2SG-DAT 10- ↑ ポンド -FOC

13) コリマ・ユカギール語では、副詞節を主節の後に置くことも可能である。後置できる副詞節の数は通常一つだけで、付帯状況や *afterthought* を付加するために使われる。

kei-ta-ma ulega.

与える -FUT-T1SG:FOC タバコ

「君が（それを）見つけたら、私は君にタバコを 10 ポンドやろう」

(Schiefner 1871a:609, 例文 80)

これらの例文においては、2 番目の単語 nugda 「見つけたら」に -da という要素が含まれている。仮定の意味を持ち、かつ音形が類似しているため、これは 19 世紀末のコリマ・ユカギール語における、仮定の意味を持つ -de 副動詞（例文 (18) を参照）と同じ要素であろう¹⁴⁾。ただし上記 2 つの例文では、帰結を表す節に入ったところで主語が変わっており、この点は 19 世紀末のものとは異なる様相を呈する。

次に、-lgene 副動詞によると思われる例文も 2 つ見出せる：

(26) kabu mot-in emüwe-i sokola ledei-dagana nenṅe-i

[もし～なら 1SG-DAT 黒い -ATTR 狐 近づく -COND] 多い -ATTR

eima ot men'ma

値段 HYP 取る -T1SG

「もし私の方に黒い狐が近づいてくるなら、（私は）多くの金を得られるだろうに」

(Schiefner 1871a:605, 例文 39)

(27) tudal mot-in mon-i tet-in n'än wosemodjä podirka-ga

3SG 1SG-DAT 言う -I3SG 2SG-DAT ? [8つ 日 -LOC

mudedei-gana mot kel-te-ja, ali dewätod'a podirka

過ぎる -COND] 1SG 来る -FUT-I1SG あるいは [9つ 日

mudedei-gana kel-ta-ja.

過ぎる -COND] 来る -FUT-I1SG

「彼は私に（こう）言った、8 日過ぎたら私はあなたのところに行く（来る）、ある

いは 9 日過ぎたら（私は）あなたのところに行く（来る）」

(Schiefner 1871a:610, 例文 84)

これらの例で仮定を表す節の末尾の単語には、いずれも -na という要素がある。この要素は位

14) これらの例文では帰結を表す節に未来形が現れている。この文法的特徴は、19 世紀末や現代のコリマ・ユカギール語とも共通する。この点からも、これらの例文はコリマ・ユカギール語の「真正な」仮定の表現であろうと考えられる。

置格の要素 -ga のすぐ後に現れるので、19世紀末や現代のコリマ・ユカギール語での -lgene 副動詞の中の仮定を示す要素 -ne と同じものであろう。仮定を示す節の直後で主語が変わるといふ文法的特徴も認められるので、これらの例文が -lgene 副動詞を含んでいると考えることに大きな問題はないと思われる。

3. 節連鎖の発達過程

ここまでの議論で、コリマ・ユカギール語の3つの時期における節連鎖の出現の様相を観察してきた。時を遡るにつれて資料が乏しくなるという点は否めないが、3つの時期のいずれについても様々な種類の副動詞があること、そして副動詞を中心とした副詞節が連なる節連鎖があることを確認できた。この結果を受けて本節では、コリマ・ユカギール語における節連鎖の発達の過程を概観する。なお前節においてこの概観に必要な要素の検討を終えているので、この節での概観は古い時期から新しい時期へと進む、通常の歴史記述の流れに沿って示していく。

既に2.3節で見たように、資料が得られるコリマ・ユカギール語の最も古い時期（早期）において実証できる節連鎖に使用された副動詞は、時間的な意味を表す副動詞のうち、主語が変わる -lge 副動詞（例文 (22)）、目的の意味を表す副動詞（の一種としての -ljin）、そして仮定の意味を表す2種類の副動詞である。この2種類とは -de 副動詞（例文 (24), (25)）と -lgene 副動詞（例文 (26), (27)）を指す。以上の状況をまとめるならば、人称に応じた屈折形を持ち、形態論的により複雑であったり（-lge 副動詞と -lgene 副動詞）、目的や仮定のような狭い意味に特化していたりする副動詞の方がより古い段階から確認できる。これに対して、形態論的に単純であったり、直後に主語を変えなかったりするような、いわゆるシンプルな副動詞の方は資料において確認できない。既に指摘したように、この状況はいささか奇妙に思われる。

そこで、この点をより詳しく検討するために、早期のコリマ・ユカギール語の民話テキスト資料を調べてみたい。この短いテキストは Schiefner (1871b) に収録されたもので、1860年前後に語られたものを、当時ヤクーツク州の要職にあった Julius Stubendorff が提供したものだといふ。ユカギールの若い夫婦の話で、同じようなやりとりが三回繰り返されているので、最初の二回だけを以下に引用する：

- (28) omoče adil terika-de-ni le-ngi. << ke lom-dok
 良い:ATTR 若者 妻 -POSS-COM いる -I3PL (呼びかけ) 何 -FOC
 jonzuriri-ma? ponburā oillä. >> — keweič, adaku-n inličaon
 眠らせる -T2SG:FOC 寝場所 ない 行く :I3SG 2つ - ↑ 熊
 keči-m. << ke lom-dok jonzuriri-ma? — jonzode oillä. >>
 持ってくる -T3SG (呼びかけ) 何 -FOC 眠らせる -T2SG:FOC ベッド ない

— keweič keči-m adaku-n monogo-x. […]
 行く :I3SG 持ってくる -T3SG 2つ - ↑ 山羊 -FOC

「良い若者が妻と暮らしていた。(妻は言った)『ねえ、なぜ眠っているの? 寝場所がないよ。』(若者は) 出かけて行って、2頭の熊を持ってきた。(妻は言った。)『ねえ、なぜ眠っているの? ベッドがないよ。』(若者は) 出かけて行って、2匹の山羊を持ってきた。(後略)」(Schiefner 1871b:435-436)

最初の妻の発言の直後に置かれた地の文に注目してみたい。ここでは2つの文が連続して現われ、どちらの文も主語は同じ(若者)である。ここで注目すべきなのは、同じ主語が続いており、起こる事態も密接に連続する(出ていく→獲物を持ってくる)にもかかわらず、接続的要素を全く使うことなく、2つの独立した単文が並置されていることである。同じ状況は2回目の妻の発言の直後にも見られ、2つの独立した動詞が連続して出現する。すなわち以上を通じて、時間的な意味を表し、主語が変わらないタイプの副動詞は使われていない。このことが示唆するのは、早期のコリマ・ユカギール語においては、特に主語が変わらない場合、副動詞を用いて複数の節を統語的に結合する節連鎖の構造がまだ十分発達していなかった可能性である¹⁵⁾。

その一方で、目的や仮定のような狭い範囲の意味に特化した副動詞は、まさに特定の用途を有しているがゆえに、早期のコリマ・ユカギール語の段階で既に成立していたと考えられる(例文(23)から(27)までがその実例)。*-lge* 副動詞自体はそれほど特化した意味を持たないが、付帯的状況の表現という特化した用途に着目すれば、比較的早い時期に成立していた可能性を想定できる。例文(22)がその一例と言えよう。ここでは*-lge* 副動詞を含む副詞節が主節に後置され、付帯的状況を表現している。

早期の資料から約半世紀後の19世紀末のコリマ・ユカギール語の時期になると、様々な種類の副動詞が節連鎖に加わってきている。資料から確認できる限り、この段階までに新たに加わった副動詞は、時間的な意味を表し、かつ主語を変えない副動詞(*-t* 副動詞、*-delle* 副動詞)、動作の目的を表す*-din* 副動詞、そして仮定を表し、主語を変えない副動詞(*-nide* 副動詞)である。これらはいずれも、19世紀末の資料において確認できる。

これらのうち、*-t* 副動詞と *-delle* 副動詞が新たに加わったことの効果は大きい。というのは、これらを積極的に用いることによって、同じ主語を持つ節同士を統語論的に結合することができるようになったからである。さらに *-delle* 副動詞による時間的先行関係の表現が加わることで、語りの緩急を伴った長い節連鎖も可能となった。現代のコリマ・ユカギール語に近い節連鎖の形がこの段階で実質的に成立したと言えるだろう。次に引用するのは19世紀末における民

15) ただし、資料自体が質量ともに非常に限られていることから、*-t* 副動詞や *-delle* 副動詞がこの段階において存在しなかったと断言することはできない。この点については第4節でさらに論じている。

話テキストの一節である：

- (29) xon-delle yalkil ord'e-ge prolube-lek a-mele. prolube a-delle
 [行く -CONV] 湖 中心 -LOC 氷の穴 -FOC 作る -T3SG:OF [氷の穴 作る -CONV]
 egede-i. egede-ge ataxu-n cukodie-k eure-l.
 覗く -I3SG [覗く -CONV] 2つ - ↑ カワカマス -FOC 泳ぐ -SF
 「(おばあさんは) 行って、湖の真ん中に氷の穴を開けた。氷の穴を開けると、覗き
 込んだ。覗き込むと、2尾のカワカマスが泳いでいた」(Jochelson 1926:248)

この一節では民話の主人公(おばあさん)の行動について、かなり詳細な描写が展開されている。描写では先行する主節の一部を副動詞の中で繰り返し、そこから新たな主節を繰り返すという手法が取られ、これが語りの緩急を生み出している。これを可能にしている主な要因が副動詞、とりわけ -delle 副動詞による節連鎖である。さらに最後の節では、主語を変える -lge 副動詞と焦点形を組み合わせることで、新たに登場した興味深い対象(2尾のカワカマス)に聴者の注意を向けることが可能にもなっている¹⁶⁾。

その一方で、動作の目的を表す -din 副動詞、および主語を変えない仮定の副動詞(-nide 副動詞)の二者が加わることにより、新たな問題が生み出された。すなわち、ほぼ同じ機能を持つ2つの文法的要素の拮抗である。前者については、既に見たように、早期のコリマ・ユカギール語の段階で、動作の目的を表す -ljin の形は存在していた(例文(23)参照)。ここに -din 副動詞が加わることで両者の拮抗の状況が生じた。長崎(2021)はこの状況とその帰結を、テキスト資料を調べることによって論じているが、結果的には -din 副動詞(長崎の用語では supine)の使用拡大と、-ljin の形(長崎の用語では与格動作名詞)の使用縮小が起こったことを指摘している。

同様な拮抗の状況は仮定の意味を表す副動詞においても起こった。つまり、早期のコリマ・ユカギール語から継承されてきた仮定の意味の -de 副動詞と、新たに生じた -nide 副動詞との間の拮抗である。なお、例文(24)と(25)では -de 副動詞の直後で主語が変わるが、Jochelson(1905)の記述では -de 副動詞は主語を変えない(例文(18)と(19)を参照)。したがって、早期と19世紀末の間のどこかの時点で -de 副動詞の文法的機能に変化が生じた結果、-nide 副動詞との間で機能の重複が起こったのかもしれない。いずれにせよ、こうして生じた状況はやがて、-de 副動詞が仮定の意味を失い、時間を表す副動詞の一種に変化することで決着した。こ

16) 焦点形はユカギール語に特徴的な文法的特徴であり、談話上はじめて登場した人・動物・物に対して用いられる。民話テキストの場合、焦点形で導入された人・動物・物はその後の展開で大きな役割を果たすことが多い。

の変化は19世紀末と現代との間に起こったと推定される。しかし、この変化の結果として -de 副動詞は、今度は -t 副動詞とほぼ同じ機能（時間的な意味を持ち、主語が変わらない）を持つことになった。現代のコリマ・ユカギール語において、副動詞同士の拮抗が新たに生じたわけである。現代における -de 副動詞の頻度が低いことは既に指摘したが、おそらく原因はこの拮抗状況に求められるだろう。

現代のコリマ・ユカギール語の節連鎖を構成する要素は、以上のような発達の過程を経ることによって出揃ったと考えられる。ただし、変化はこれで終結したわけではなく、その後も節連鎖をめぐる小さな文法変化は続いている。この節の最後に、そのような変化の一例として、筆者が既に遠藤（2017）で検討した引用構文の発達について簡単に述べておこう。

誰かの発言を直接引用し、節連鎖の一部に組み込む統語的な仕組みを指して、ここでは引用構文と呼ぶ。現代のコリマ・ユカギール語の引用構文では、自動詞 mon-「言う」の -t 副動詞にあたる monut「言って」を使い、発言を直接引用する：

- (30) čolkəra:-de: (…) aʒu:lə tadi:l'əl-u-m,
 ウサギ -DIM ことば -INSTR 与える -EVID-△ -T3SG
 mət terikə-t-tə-jə mon-u-t.
 [1SG 妻 -手に入れる -FUT-I1SG] 言う -△ -CONV
 「ウサギはそれから『僕は結婚するぞ』と約束した」[NK43-11]

この例では、mət terikəttəjə「僕は結婚するぞ」の部分が引用された発言である。monut は発言の後に置かれ、疑似的な補文標識として機能するとともに、それ自身が副動詞として主節と文法的に結びついている。この構文は現代のコリマ・ユカギール語の民話では頻繁に見られるが、必ずしも以前から使われていたわけではない。事実、19世紀末においては、主節と引用された発言を並置するという手法が主なものであった¹⁷⁾：

- (31) natlebie mon-ni: “tiŋ n'emolkil-ge met legul omočə
 ワタリガラス 言う -I3SG この 年 -LOC 1SG 食物 良く
 ukei-lel.”
 出る -EVID:3SG
 「ワタリガラスは『今年は食物が豊富だ』と言った」(Jochelson 1926:244)

17) 例文(27)を参照するならば、さらに前の時期、早期のコリマ・ユカギール語においても同様の手法による発言の引用が行われていたことが確認できる。

したがって、引用構文は19世紀末から現代までの間に大きく発達した構文である。このようにコリマ・ユカギール語の節連鎖は小さな変化を繰り返しつつ、現在のような姿に至っているとと言える。

4. 節連鎖の発達における要因—結びに代えて—

以上の議論では、資料から確認できる限りにおいて、コリマ・ユカギール語の節連鎖の発達の過程を辿ってきた。しかし、まだ問題は残っている。資料に現れていない要素やその発達の過程についてどう考えるべきかという問題である。

過去のコリマ・ユカギール語の資料は決して充実しているとは言えない。特に、早期の資料は質量ともに貧弱である。早期のコリマ・ユカギール語の資料中に -t 副動詞や -delle 副動詞が見出されないことは第3節で指摘したが、このような状況下で、これらの副動詞が当時存在していなかったとは断言できないから、考察はここで立ち止まる。この問題に対する解決を見出すには、同系統に属するツンドラ・ユカギール語との比較によって、より古い段階の姿を探らなければならない。

ソ連時代のユカギール語研究者クレイノヴィチは、ツンドラ・ユカギール語とコリマ・ユカギール語の間に一定の音韻対応が見出されることを指摘した¹⁸⁾。その音韻対応の一つに、語末におけるツンドラ・ユカギール語 r とコリマ・ユカギール語 t がある：

(32) ツンドラ・ユカギール語 r とコリマ・ユカギール語 t の音韻対応例：

ツンドラ・ユカギール語	コリマ・ユカギール語	
awur	abut	「小箱, 袋」
pelur	polut	「夫」
enmur	onmut	「角 (つの)」

(Krejnovič 1958:18)

この音韻対応に基づけば、コリマ・ユカギール語の -t 副動詞に対応する -r という形式がツンドラ・ユカギール語に予想される。そして実際にツンドラ・ユカギール語には -r 副動詞が存在する。次はその文例である：

18) クレイノヴィチ自身はこの両者に対して「方言」という用語を使っている。ここでは現代の研究者の用語に従い、両者をそれぞれ「ツンドラ・ユカギール語 (Tundra Yukaghir)」と「コリマ・ユカギール語 (Kolyma Yukaghir)」と呼ぶ。

- (33) met ile taŋud-u-r mer=utte-t'en
 1SG [トナカイ 追跡する -△ -CONV] FOC= 疲れる -I1SG
 「私はトナカイを追跡し疲れた」(Krejnovič 1958:198)

ここでは3番目の単語が副動詞であり、予想通りに語末に -r が現れている。以上の比較により、コリマ・ユカギール語の -t 副動詞はツンドラ・ユカギール語の -r 副動詞と音韻対応によって関連付けられる。言い換えれば、-r 副動詞はコリマ・ユカギール語における本源的な要素である。早期のコリマ・ユカギール語の資料に -r 副動詞は現れないが、仮に資料がもっと残っていたならば当然見出されたと推測できる。

他の副動詞についても、両者間で類似した形式が認められる。時間的な意味を表す副動詞のうち、主語を変えないものを対照してみよう：

(34) ツンドラ・ユカギール語とコリマ・ユカギール語の副動詞（一部）

ツンドラ・ユカギール語	コリマ・ユカギール語	副動詞の意味
-r	-t	同時、一体的動作
-re(ŋ)~de(ŋ)	-de	同時、(仮定・条件) ¹⁹⁾
-relek~delek	-delle	先行する動作
-relde~delde		先行する動作

これらのうち、-r 副動詞（ツンドラ・ユカギール語）と -t 副動詞の関係については既に考察した。他の副動詞についても類似は著しい。たとえば -de 副動詞については、両者間でほぼ形が一致しており、19世紀末のコリマ・ユカギール語を視野に入れば意味も一致する。より興味深いのは、コリマ・ユカギール語における -delle 副動詞のケースである。既に Jochelson (1905:407) も指摘している通り、この接尾辞の末尾に -le という要素が含まれており、これは具格（「～で、～によって」）の標識と同じ形をしている。また、もう一つの -l- の方は動名詞の標識として分析可能である。このように -delle 副動詞全体は「～することによって」と解釈できるので、ここから「先行する動作」という意味は自然に導き出される。以上の状況はツンドラ・ユカギール語とも共通している。すなわち -relek~delek 副動詞には具格の標識 -lek が含まれており、この副動詞はやはり先行する動作を表している。動名詞の標識 -l- はもう一つの副動詞 -relde~delde の中に認められよう。

19) 「仮定、条件」という意味は、現代ではツンドラ・ユカギール語の -re 副動詞のみが持つため、ここでは括弧で囲んだ。本論文で既に見た通り、19世紀末以前のコリマ・ユカギール語においては -de 副動詞は仮定の意味を持っていた。

このように-lを動名詞の標識として分析することで、他の副動詞の由来についても一定の見通しが立つ。たとえば、19世紀末まで使われていた-lɲinの形は、動名詞の向格（標識-lɲin）として解釈できる（cf. 長崎 2021）。また、コリマ・ユカギール語で比較的早くから成立していた-lge副動詞は、動名詞の所格（標識-ge~ke）として解釈できる。また、-lgene副動詞は言うまでもなく、その後ろに仮定の標識-neを接尾させたものである。このように考えるならば、-t副動詞と-de副動詞を除くすべての副動詞に関して、少なくとも19世紀末までに、動名詞の格屈折形による形成が集中的に行われた段階があったことが推測できる。コリマ・ユカギール語における格の一覧と、動名詞の格屈折形による副動詞形成の道筋を以下に示す：

(35) 名詞の格および格接尾辞	動名詞の格屈折形	副動詞
基本格 - φ	-l	（補部節として使用）
所格 -ge~ke	-lge	-lge, -lgene 副動詞
離格 -get~ket	-lget	（-lget 原因・理由）
向格 -ɲin~kin	-lɲin	-lɲin（動作の目的）
経由格 -gen~ken	-lgen	（-lgen 原因・理由）
具格 -le	-l-le	-delle 副動詞
目的格 -gele~kele	……	
共格 -n'e	……	

なお、括弧で囲まれた-lget（動名詞の離格）と-lgen（動名詞の経由格）は、頻度はごく小さいものの、原因・理由を表す周辺的な表現としてテキスト資料の中に出現する。

このままの形成の道筋が続けば、現代のコリマ・ユカギール語は様々な種類の副動詞を用い、短い節連鎖を中心にテキストを構成するような言語になったと予想できる。しかしながら、ここに別の傾向が現れた結果、実際には少し違う姿を見せることになった。傾向の一つ目は、節連鎖中の副動詞の種類が絞られるようになってきたことである。現代のコリマ・ユカギール語の民話テキストでは、頻繁に現れる副動詞は-t, -delle, -lgeの3種類に集中してきている。また、多様な意味（理由、因果関係、時には逆接）を特定の形式によって表現することなく、解釈を文脈に依存させるようになってきている。傾向の二つ目は節連鎖自体の長大化である。話者による文体的な好みもあるが、現代のコリマ・ユカギール語の民話では数個の副動詞が連続することは稀ではない。ここに-lge副動詞による主語の転換が加わると、節連鎖はさらに長くなりうる。節連鎖中で-lge副動詞を適切に使うことで、語りの緩急をコントロールしようとする傾向も伺える。

ここでサピアにならって「駆流」(drift)という語を用いるなら、現在までの約200年の間に、コリマ・ユカギール語の節連鎖は二つの駆流に翻弄されたと言えるだろう。動名詞由来の

副動詞の積極的な形成と、節連鎖の充実による統語構造の変貌がそれである。これらの駆流の将来の行方はまだ分からない。今後も興味を持って見守っていきたい。

【例文のグロスに使用した省略記号一覧】

AFF (affirmative mood), ALL (allative case), ATTR (attributive form), COM (comitative form), COND (conditional mood), CONV (converb), DAT (dative case), DIM (diminutive), EVID (evidential mood), FOC (focus), FUT (future), HYP (hypothetical mood), I (intransitive), INC (inchoative), INSTR (instrumental case), LOC (locative), OF (object focus), PL (plural), POSS (possessive), PROG (progressive), SF (subject focus), SG (singular), SUP (supine), T (transitive), VN (verbal noun), 1 (first person), 2 (second person), 3 (third person), △ (inserted vowel), ↑ (linking consonant)

参考文献

- 遠藤史 (2017) 「コリマ・ユカギール語の引用構文とその発達」『北方人文研究』10, pp.129-143. 札幌：北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.
- Jochelson, Waldemar (1905) Essay on the grammar of the Yukaghir language. *American Anthropologist new series* 7(2), pp.369-424.
- (1926) *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus. The Jesup North Pacific Expedition, volume 9, Memoirs of the American Museum of Natural History*. Leiden: E. J. Brill.
- Krejnovič, E. A. (1958) *Jukagirskij jazyk*. Moskva/Leningrad: Nauka.
- 長崎郁 (2021) 「コリマ・ユカギール語の Supine：統語機能と言語接触」『北方言語研究』11, pp.17-35. 富山：日本北方言語学会.
- Nikolaeva, Irina (1997) *Yukagir texts. Specimina Sibirica XIII*. Szombathely: Savariae.
- Schiefner, Anton (1871a) Über Baron Gerhard von Maydell's jukagirische Sprachproben. *Mélanges Asiatiques* 5-6, pp.600-636. St. Petersbourg.
- (1871b) Beiträge zur Kenntniss der jukagirischen Sprache. *Mélanges Asiatiques* 6-3-4, pp.409-446. St. Petersbourg.

On the Development of Clause-chaining Constructions in Kolyma Yukaghir: From a Viewpoint of Historical Syntax

Fubito ENDO

Abstract

The aim of this paper is to outline the developmental stages of clause chains found in complex sentences in Kolyma Yukaghir from the perspective of historical syntax, and to consider the factors that are thought to have played a role in their development. Clause chains, or clause-chaining constructions, make up a significant portion of the language's complex sentences. When we examine text materials collected at various points in time, we find that the occurrence of this construction differs depending on the period. If considered from a diachronic perspective, this can be seen as a historical change, or in one word, development. It is an interesting hypothesis to assume that several factors were at play in this development, and this paper will undertake a consideration of these factors.